



「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年⑧

今年の夏も約10日間タイに行ってきた。去年に引き続き、ロップリーのシリワット先生のところで、約30名の小中学校の先生対象に環境学習のワークショップを行った。パンダキャンプでもワークショップを行う。こちらは午前中、小中学生30名、午後は近隣の大人対象である(30名)。ワークショップも役割を変化させてきたように思う。はじめは日本からのテクノロジーの紹介。そろそろ形を変えなければと思う。タイの地元で地元の身近なフィールドを使い、地元で入手でき

る材料を使って簡単な環境測定を行ったり、自分たちのライフスタイルを考えるものをしていきたい。運営委員会等で話し合っていきたいが、アイデアを持っていたら是非事務局まで連絡してほしい。とにかく来年も続きそうである。

今回は、ラジャバトプラナコーン大学とパンダキャンプとのなんとなくごちゃごちゃした人間関係がわかる若林さんの文章があったので紹介する。
(中込 卓男)

「タイの鳥 1より」 『自然教室』 若林卓司 日記より

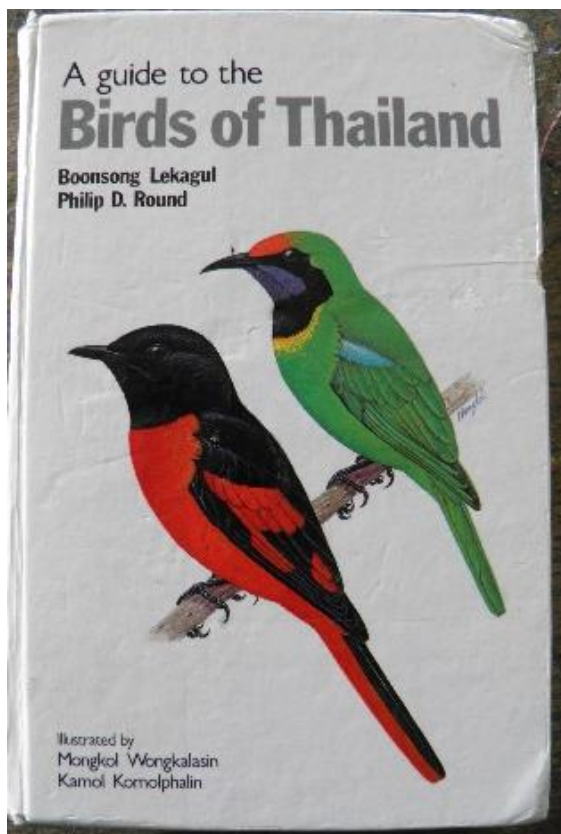
私がプラナコーン教育大学(今はプラナコーンインスティテュート)で本格的に教え始めたのは1993年からだったと思う。その時、一緒に日本語を教えていたブンティワ先生のとりにして、理学部の先生を知るようになった。私もあいている時間、先生にお願いして授業を受けさせてもらった。ブラパー先生には生物学を、タルワイティップ先生には植物学を教えてもらった。当時、先生たちは環境教育を充実させようといろいろ努力されていた。その中心になって活動されていたのが、今のTJクラブの会長のラッタワン先生。その手足となって動かれていたのがシリワット先生だった。先生たちは、学内や学外の学生たちのために多くの教育キャンプを実施されていた。そして、私も誘いを受けた。私が初めて参加したのは

カオヤイだった。その時、私はこの教育キャンプを手伝っていた何人かのプラナコーンの学生と知り合いになった。トゥットゥー、プイ、エーク、ボーイ、ノイなどがいたがトゥットゥーだけとは今でも連絡を取り合っている。その時、一人学外の人に来ていた。その人がシリポンさんで、当時WWFタイランドの職員だった。このシリポンさんは自分でも別個に教育キャンプを企画していた。そして、そのキャンプを「緑の学校」と呼んでいた。ボランティアはほとんどがプラナコーンの学生だった。トゥムは空軍の兵士だったが、トゥムも仕事が終わってから、プラナコーンの社会人コースで学んでいた。初めて参加したプラナコーンのカオヤイでのキャンプで親しくなって、シリポンさんから次の「緑の学校」に招待された。

行ったところはチョンブリー県にあるバーンプラという大きな貯水池の畔にある禁猟区のキャンプ地だった。すぐ近くにはオオツルの繁殖ゲージがあった。今ではタイで見られなくなったこのツルを再び自然に返すために地道な努力がなされている。この時はバンコクの小学校から生徒が30人ほど来ていた。行きバスでは、歌を歌ったり、ゲームをしたり、みんなとても楽しそうだった。私はこの企画はシリボンさんが勧めている保護基金が主催しているものだと思っていた。しかし、聞いてみると、独自で企画しているという。費用は会社巡りをしてスポンサーを募ったと言うし、たまには寺へ行ってものをわけてもらうという。

初回、私は全くのお客様だったので、みんながプログラムに沿って活動しているなか、私一人は鳥を見てもいいということだった。私はその言葉に甘えて、キャンプ地の周りを歩き回った。夕方、私は鳥について話をするようになっていた。日本でもタイでも見られる鳥を選んで、その鳥の声をテープで聞かせ、簡単な説明を加えた。私の仕事はこれだけだった。そして、その時は一緒に宿泊せずにバンコクへ帰った。けれどこれを契機として、私はその後「緑の学校」と付き合うことになった。

その頃、「タイの鳥」が出版されて間がなかった。



タイでは少しずつバードウォッチングが一般に復旧しだした頃だった。この本はブーンソン博士が英人のフィリップ・ラウンド氏の協力のもと、二人のイラストレーター、カモン・コモルフリン、モンコン・ウォンカラシン両氏の協力を得て生まれたもので、それまでベン・キング等の「東南アジアの鳥」しか利用できなかったのに比べても便利になった。そして、プラナコーンの教育キャンプでも「緑の学校」でもバードウォッチングをプログラムに取り入れようとしていた。日本では時代遅れの私のカメラや500ミリの反射型望遠レンズ、録音機や集音機はここではまだ珍しい、高価なものだった。

プラナコーンでは学生を中心にバードクラブ設立の機運が盛り上がっていた。その時、私自身まだ日本野鳥の会・京都支部の会員だったので、昔よく一緒に苔寺の奥に鳥を見に行った井上さんに手紙を書いて、寄付のお願いをした。井上さんはいろいろよくしてくださって、支部から貴重なものをいただいた。いくつかの双眼鏡や寄付金で買った3本のニコンの新しい望遠鏡は学生にとって素晴らしい贈り物だった。これは京都支部からプラナコーンへの寄付ということになったので、学校側ではトン学長の出席で寄贈式が行われ、私が八木支部長の代理を務めた。

私は大学のキャンプにも、「緑の学校」にもよく行った。大学のキャンプではカンチャナブリー県のカオナムプやチャンタブリー県のカオソイダーオのキャンプは印象深かった。「緑の学校」では、私が参加した時はカオヤイへ一度行った以外、いつもバーンプラだった。泊まった次の日の朝は決まって鳥を見に行った。学生たちは新しい望遠鏡を先頭に、参加者を引率していた。キャンプでは、参加者はバードウォッチングの他、ゲームを楽しんだり、木の葉や枝を使って絵を描いたり、造形物を作ったり、森の中を散策したりした。ここには都会にないものがいっぱいあった。飯盒で米を炊き、キャンプファイヤーをし、テントに寝る。いつも帰るとき参加者は口をそろえて言った。「楽しかった。又、来たい。」「いろいろなことがわかった。」と。私もあるときは日本の鳥のことを話したり、新聞紙で兜を作って遊んだり、折鶴コンテストをしたこともあった。

あれは大学のキャンプでカオヤイに行った時のことだった。カオヤイにはよく行っているの、何回目の時か覚えていないが、夕暮れ時、講師として来ていたシリポンさんが誘うので、二人でモーシントーのあたりへ行った。高台に腰を下ろすと、遠くで草を食んでいるシカの姿がたくさん見下ろせた。私たちはいろんなことを話した。シリポンさんは今の仕事に疑問を持っていた。上の人間は高い給料を取り、法人の金を使ってベンツを買って、自分の車のように乗りまわしている。シリポンさんは十分に仕事をしているのに、理解されず、それに見合う給料をもらっていない。その当時に、八千バーツぐらいしかもらっていないと言っていた。大学での公務員の初任給が六千バーツちょっとのころのことだ。彼はチュラ大を出て、一度職についてから、今の仕事に移った。そして、3か月イギリスで研修を受けている。その時、もっと個人的な話もしてくれた。彼は仕事をやめて、「緑の学校」を生計が成り立つ程度に企業化しようと思っているらしかった。そして、彼にチャンスが巡ってきた。彼はそれが5分間のテレビ番組ではあったけれど、環境教育の進行役に選ばれた。毎回、あちこちの学校の生徒に自然のいろいろなことを体験させ、教える番組だった。そのころから、シリポンさんはプラナコーンに贈られた望遠

鏡を勝手に持ち出しているという苦情を聞くようになった。プラナコーンの先生もあまりいい感情を持っていないようだった。そして学生たちのグループも分裂してしまった。シリポンさんは大学のキャンプに来なくなった。一度、今持っている番組を買ってくれる日本企業はないかと尋ねられたこともあったが、私には心当たりがなかった。それから少ししてそのテレビ番組はなくなってしまった。トゥットゥーにシリポンさんのことを聞いたことがあった。シリポンさんはWWFタイランドも辞めてしまったということだった。しかしトゥットゥーはあまり話したがないのでこの話はそれきりになってしまった。

彼との思い出はいろいろある。中でも、カオヤイで大学生のための教育キャンプをしたとき、ハウスワット滝からカオレームへ行って、テントを張ったことがあった。食べ物が乏しく、ナムプリック・メンダーともち米しかなかった。最初何のナムプリックかわからなかったので何かと聞いてみると「メンダー」（たがめ）だと言う。そのとたんにもち米だけで済まそうと思った。翌朝、有志で探鳥に出かけた。そして、森の中で道に迷ってしまった。結局、三時間に及ぶ彷徨で元に戻ることが出来たが、私には忘れられぬ思い出になった。



12月2日に、小菅村内において本会の運営委員会を開催しました。次年度の予定を検討しながら、(新)植物と人々の博物館の、書籍・標本・展示物の整理整頓を行いました。5月にはお披露目の予定、それまでは準備中です～。

こんなこともありました



10月22～23日かけて、台風21号が上陸。この時期の台風は、8月と違って雨も水も冷たく感じます(写真は、木下養魚場のある山沢川)。

12月8日現在。小菅村では、道路の凍結を気にしながら生活しています。